（『国語学』177集　1994・6・30）

音　韻（理論・現代）

久野マリ子

はじめに

「日本語の音韻」というものがラングとして確固として存在するかのように扱われることが多い。しかし、東京語アクセントだけを見てもその実態は一様ではない。アクセント辞典に多く記載されている併用型をどの様に考えるべきか。例えば「頭」は、アクセント辞典では見出し形は　③(アタマ)であるが、実際には　②(アタマ)という型もある。アタマは、「東京アクセントの地域差と世代差――下町および五日市町」（日本語音声成果刊行書『東京語音声の諸相』3　佐藤亮一・三井はるみ・渡辺喜代子）によれば、分布はないが都内各地に点在するという。また、これまでの類別語彙に限られ調査では日本語アクセント全体を知るには不十分であるとの認識が広まっている。多拍語や、外来語、漢語についての研究が進められているが、ここでも従来の東京語アクセント規則と一致しない例が報告されている。

このように、東京語のアクセント・音韻と言っても、現在どんな人がどこで典型的な東京語の音声とアクセントで話しているのかは、それほど明らかなことではない。

方言音声についても、ガ行鼻濁音・無声化・無型アクセントなどの全国分布がかなり変化していて、今までの分布図は実態に合わなくなっている。新しい全国規模の調査が必要であろう。

文部省科研費重点領域研究『日本語音声（略称）』〈代表杉藤美代子〉が終了し、大きな成果をあげた。このプロジェクトによって、韻律の研究や音響分析を導入した研究が増えている（以下、『日本語音声』と略す）。

パソコン、ワープロが文房具として普及した。大量に収集・蓄積されたデータが、例えばパソコン通信によるデータ検索などによって共有されるようにならないだろうか。複数の人が莫大な労力をそそいで、同じ様なデータベースを作っているのではないだろうか。これらが効率よく利用できるなら、音韻研究はさらに能率よく進むであろう。また、パソコン、ワープロによる印刷発表が増えている。本質的なことではないが、見やすさに配慮して欲しい。例えば、半角と全角の文字の大きさによって対立を見分けるのは見にくいし、執筆者や論文毎に版面や体裁が違うのも見苦しい。

『現代日本語方言大辞典』（明治書院、平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編）1～6巻が刊行され、索引と逆引き

索引を残すだけとなった。漢語や外来語の例が少ないが、全国七二地点の音声・アクセント辞典にもなる。

［注］節約のため、以下、題目以外は、本文中のアクセントはア、イントネーションはイントと省略する。

一、音声・音韻

（一）方法をめぐって

音声・音韻一般については音声学会の活動が活発だった。〈ワークショップ〉提案＝比企静雄・岡田秀穂・上村幸雄・小池靖夫・竹林滋、司会＝大西雅行「新しいＩＰＡによる日本語の表記について」（『音声学会会報』201）では基本案について議論があった。窪薗晴夫「新しい音声・音韻研究の展開」（『日本音響学会誌』48－1）は、音声研究の現状と展望、音声合成などの他の分野に及ぼす可能性・課題を指摘する。

日本語の音韻を扱ったものに、城田俊『日本語の音――音声学と音韻論』（ひつじ書房）がある。近藤清兄「調音音声学における構成的立場について」（『東北大学文学部日本語学科学論集』2）は、音声学を説く際構成的に言語音を定義する立場を述べる。岡田秀俊「日本語諸方言の音調体系の定式化(4)(5)」（『金沢大学教養部論集人文科学編』31－1）は、奈良田・蓮田などの重起伏音調の方言の規則を示す。

（二）音声の実態報告

1、記述的研究

音韻を静的な共時態の記述ではなく、常に変化する実態を記述することに関心が移っている。音声資料の収集と記述に関する方法は基本的な問題であるにもかかわらず、個人の技量と見識に任されてきた。一方、記述的研究が主観的記述で客観性に乏しいという指摘も常にあった。音韻理論の基礎になる音声資料の重要性が、ますます高まる現在、資料の質や収集について共通の理解や枠組みについての議論がほしい。

久野眞「波照間方言の音韻」（『日本語論究1　言語学とその周辺』和泉書院）は、琉球先島方言に見られる音韻の問題を簡潔に鮮明に指摘する。波照間方言に見られる個人差とゆれは、全く別の音素に該当するほど大きい（例　中舌母音i、eや、無声化の問題）。どの部分を記述するのか、誰の音声を記述するのかを考えさせられる。

かりまたしげひさ「大神島方言のフォネームをめぐって」（『沖縄文化』78）、大神島では有声子音と無声子音との対立の有無が問題になる。崎山理、柴田武、中本正智、加治工真市諸氏の研究を紹介しつつ、音韻体系の解釈を提案する。この他、方言の記述としては、木部暢子「トカラ列島宝島の中舌母音」（『国語国文　薩摩路』37）、方言音韻規則として、有元光彦「五島列島・下崎山町方言の動詞語幹におけるo／e交替」（『九大言語学研究室報告』13）がある。

2、鼻濁音について

清音、濁音の問題は、通時的研究からも注目される。ガ行鼻音と前鼻音の歴史が今後再び問題となりそうだ。この議論のきっかけとなるのは、斉藤孝滋「岩手方言における語中子音有声化・鼻濁音化現象――言語内的・外的要因の観点から」（『国語学』168）で、斉藤には有声化について一連の論考がある。また、福島県小高町で前鼻音を伴うガ行子音が見つかり、加藤正信・斉藤孝滋により音声学会第288回研究例会に報告されている。高山倫明「促音のあとの濁音」（『島大国文』

21）は、東北方言で、促音の後に濁音がこないことから、かつて有声・無声の対立に前鼻音が関与していた可能性を指摘する。

陣内正敬「地方におけるガ行鼻濁音意識――関西と九州における大学生アンケート調査より」（『言語文化論究』3）は、ガ行鼻濁音に対する関西と九州の若年層での意識差を見る。東京都内の老年層では、未だにガ行鼻濁音は美しいと意識されているが、九州ではガ行鼻濁音に対する関心は薄い。正しい発音として教育されるガ行鼻濁音の見直しの時期がきているのではないか。

3、音声資料について

音声は、一端失われればその復元はほとんど不可能である。そして、方言音声は急速に失われつつある。また、共通語の基礎である東京語の音声実態も、まだ十分には明かにされていない。昔ながらの典型的な方言音声だけでなく、現在の日本語の実態が収録されることは意義があろう。『日本語音声』の音声資料は貴重である。

久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫『南琉球新城島の方言』、『ザンを上納した人達』（國學院大学日本文化研究所）は、消滅しかけている新城方言の記述的研究。CDで音声を提供した。新城方言の特徴である強い摩擦を伴う中舌母音のiやその他の特徴的な子音・音節・音対応が、カセットテープより良質の音質で聞くことができる。録音項目に対しては、ある程度まとまった文形式や、方言音声での拍体系表が欲しいという意見もある。音声資料の発表や公開について工夫が必要である。

4、音響分析について

『音声録聞見』（桐谷滋・今川博開発）や、INSAS／M Ver.2（三輪譲二・今石元久開発）の音響分析ソフトが開発・提供され、以前より手軽に音響分析が可能になった。今後は分析結果の意味について考察した研究が増えるだろう。

音響分析の現状については、前川喜久雄〈書評・杉藤美代子「日本語アクセントの研究」〉（『国語学』174）に詳しい。音響音声学と調音音声学は補い合う関係にあるべきだが、調音音声学が「名人芸」に矮小化するという意見と、音響音声学が言語的価値に関係のない要素までも記録するので、言語的事実をゆがめ、過度の一般化に陥れば言語の実体から離れてしまうという意見とが長い間議論されてきた。しかし「おそ下がり」のように、母音が無声化した拍にア核を知覚する理由が、後に続く拍の基本周波数のパタンによるなどという成果は、まさに音響音声学の威力である。

城生佰太郎「Visi-pitchを用いた日本語アクセントの実態研究」（『語学研究』6-1）、今石元久「琉球方言における母音の音響的特徴について」（『広島女子大学文学部紀要』28）、荻野綱男編『日本語の音声構造』3（筑波大学大学院地域研究科レポート）などがある。

音声のデータベースについては、板橋秀一「日本語方言音声データベースについて」（『国語学』170）がある。板橋は音声データベースについて理科系の研究者が望む、大量の、後で検証ができる、高品位のデータの収集とその利用の可能性について述べる。

5、日本語教育の立場から

日本語教育の音声教育は音韻研究の実践部門といえる。従来の音韻研究では、音声がどのように聞こえているかという聞き取りについての研究は少なかった。異なる音韻体系をもつ学習者を対象とする日本語教育研究からは、土岐哲「東京出身者と大阪出身者による同一音声資料の聞き取り結果」（『待兼山論叢　日本文学篇』26）、北村

よう「中国語話者から見た日本語の発音――母音を中心として」（『東海大学紀要留学生センター』12）、内田照久「中国人日本人学習者における長音と促音の聴覚的認知の特徴」（『教育心理学研究』41）、堀口純子「日本語学習者による方言音声と清濁と特殊拍の聴き取り」（『文芸言語研究　言語編』23）がある。堀口は『日本語音声』の成果CD「桃太郎」の方言読みを利用したもの。

二、アクセント・イントネーション

（一）方法をめぐって

今期もこの分野は研究が盛んであったが、アの研究対象に変化が見られる。類を中心とした伝統的な和語の研究の他に、外来語や複合語などの長い単位を扱うものが増えた。イントや音調の研究が盛んになるにつれて、研究の対象がより長い単位を対象とすることになる。長い単位を扱うためには、アの単位を再解釈する必要がある。「拍・音節」、「モーラ・シラブル」についての考察が多くなるのも当然の流れであろう。

ア核の問題について議論があった。これは基本的な概念で、東京語や京都・大阪方言のアではそれほどではないが、東北方言や北陸方言、琉球方言や九州方言の研究にはきわめて重要な概念である。

上野善道「昇り核について」（『音声学会会報』199）は、昇り核の性質を大西拓一郎の見解を取り上げて論評したもの。ア核として次の四種を提案する。「下げ核…次を下げようとする力」、「上げ核…次を上げようとする力」、「昇り核…そこで昇ろうとする力」、「降り核…そこで降ろうとする力」。

アの記述について重要な提案がなされた。柴田武「〈短信〉アクセント核の逆算指定」（『国語学』171）は、日本語に限らず、音節または拍間の高低・強弱・（長短）差でアを表す言語で、しかもア核が固定している場合は、語頭か語末かでなければ、−2か−3で、+2とか+3とかは見当たらない。ア表示は、語頭でなければ、語末から数えていくつめで表すのが妥当な方法であるということを提案する。

（二）アクセント

アの実態を動的・立体的に捉えて記述する研究が多かった。佐藤亮一他「地域言語における場面差と世代差――山形県東田川郡三川町の調査から」（『日本方言研究会第56回発表原稿集』）は、表面的には共通語化が進んでいるように見えても、場面による使い分けがあり、簡単に共通語化したとは言えないという。秋永一枝・田中ゆかり・松永修一・吉田健二「言葉の馴染み度とアクセントとの関係」（『早稲田大学日本語研究センター紀要』4）は、ア変化に語をどのくらい馴染みがあるかが影響するという。また、秋永一枝「フク」を「フ△ク」と聞くことなど――アクセント核の移りと聞こえの方言差」（『日本方言研究会第56回発表原稿集』）は、既知のこととされていた、母音の無声化によるア核の移動が不安定な語についての論。これもア調査時の聞き誤りだけではなく、方言実態の変化もからんだ問題と思われる。

1、アクセントの共通語化

共通語の基礎となる、東京アの研究は重要である。大量の語数と話者、細かい場面差などの大都市調査は困難を伴うが、それだけに期待も大きい。佐藤亮一「アクセント：地域アクセント研究の現状と課題――社会言語学的な視点から」（『国文学解釈と教材の研究』38-12）は、東京語も含めた現代方言のア研究の問題点について概観し、有益で

ある。現在ア研究は、漢語・外来語などはほとんど手つかずの状態である。特に、東京アは都区内でアのゆれが多く、年代差・地域差（山の手と下町）、新古の差がある。複合動詞・複合形容詞は平板型→起伏型へ、名詞は起伏型→平板型への変化が目だつという。

相澤正夫「進行中のアクセント変化――東京語の複合動詞の場合」（『国立国語研究所報告』104〈研究報告集13〉）は、東京語の複合動詞（動詞＋動詞）のアが、従来言われてきた規則性が失われていく過程とそこに関与する要因を明らかにする。前部要素が起伏式動詞の888例が、平板式から起伏式への変化が急速に進んでいる。特に、拍数の多い動詞ほど早く変化していることを指摘する。

田中ゆかり「方言接触からみた首都圏西部のアクセント――二・三拍名詞の場合」（『音声学会会報』204）は、アの共通語化を東京23区を除く50キロ圏の老年層と若年層とを比較する。「油」のように男女によって共通語化のスピードが違う語を、語の馴染み度によって説明する。

専門用語の平板化を指摘した、井上史雄「業界用語のアクセント――専門家アクセントの性格」（『言語』21-2）は、共通語アの階層差を示す。

若年層の調査では、大西拓一郎「方言の現在(9)方言アクセントの現在――仙台市方言におけるアクセントの獲得を中心に」（『日本語学』11-10）や、森下喜一「福島方言アクセントの年齢的特徴」（『作新学院大学紀要』3）がある。無型アの方言でも若年層では共通語化によるアを獲得するという。中井幸比古・小泉明子「三重県中部における中学生のアクセント」（『音声学会会報』201）、中井幸比古「香川県引田町のアクセント」（『アジア・アフリカ文法研究』21）も興味深い。

吉田健二「埼玉特殊アクセントの崩壊過程」（『国文学研究』111）は、東京からの移住者が増えるにしたがい急速に共通語化する地域の研究で、東京近郊の千葉県「房総アクセント」の行方とともに変化の方向が注目される。

亀田裕美「読み上げ式と対比した談話の音調実現相と情意表現」（『東北大学文学部日本語学科論集』3）は、音韻的解釈をしたア体系と現実のアの不一致を説明する面白い試み。調査に「この～がある」のような短文の中に語が現れる例が欲しかった。単独のばあいと談話の中でのアが異なる例がある。

『東京語音声の諸相』3には前出の他、「言葉の馴染み度と発音――地域差を中心に」（秋永一枝・田中ゆかり・松永修一）、「東京旧市内のアクセント1――高年層20名資料一覧」（秋永一枝）、「放送音声の地域言語に与える影響」（馬瀬良雄・沢木幹栄・柳真弓）、「東京都における言語実態の諸相」（大島一郎他）、「放送音声の韻律的差異に関する研究」（菅野謙・石野博史・永島信道・秋山和平）の、貴重な研究報告がある。

2、複合語のアクセント

上野善道「複合名詞のアクセントについて」（『言語』21-7）は、未知の単語を初めて読む時どのようなアで読むかという疑問をもとに、複合名詞アの規則のタイプが、方言ごとに簡潔に述べられている。X（前部要素）の情報によって決まるX型（鹿児島方言）、Y（後部要素）によって決まるY型（東京語）、両方の要素によって決まるXY型（京都方言）、（岩手県雫石方言）の四種がある。この中XY型は、ア核の種類が二種類以上ある方言である点が興味深い。各方言での分布や実態が知りたい。また、上野「青森市方言の複合名詞のアクセント規則1」（『東京大学言語学論集』13）は、複合語のア規則全般についての議論が有益。大量の調査資料がつく。他に「喜界島方言の体言のアクセント資料」（『アジア・アフリカ文法研究』21）がある。

3、外来語のアクセント

柴田武「外来語におけるアクセント核の位置」(『国語論究4　現代語・方言の研究』明治書院)は、東京語では、外来語アで英語を起源とする語の約7割が、-3の位置にア核がくる。秋田・鹿児島のシラビーム方言では、-2の位置にア核がくるという。年代差はないのだろうか。

山口幸洋「方言外来語のアクセントの研究1」(『静大国文』36)は、外来語を方言が組み込む時、方言の性質に合った変化を起こすから、外来語ア規則は東京式方言とか京阪式方言のような大ざっぱなものではない、と各方言の事情を参考にする必要性を説く。共通語の例では、李香蘭「外来語アクセントの原則にはずれる語の分析――音韻的な要因を中心に」(『東北大学言語学論集』1)、「日本語における外来語のアクセントの拍数別特徴」(『東北大学文学部日本語学科論集』2)がある。

4、通時的研究

通時的研究は、松森晶子「日本語アクセントの祖体系再建の試み――いわゆる〝下降式アクセント〟の成立に関する考察をもとにして」(『言語研究』103)がある。日本語方言に見られるダウンステップをもとに類聚名義抄以前の日本語アの祖系を再建しようとする力作。さらに琉球方言アにもふれるが、琉球方言では語形も拍数も地域によって異なるから、類聚名義抄の類別語彙のアは有効ではない。琉球方言独自の類別語彙のようなものを作成する必要があろう。早田輝洋「上代日本語のおもかげ」(『日本語論』2)にコメントがある。

5、共通語のアクセント

実際的な応用のための共通語ア研究は、大量の資料から、共通語のアの姿を探ろうとする。佐藤大和「共通語アクセントの成因分析」(『日本音響学会誌』49-11)は、『明解アクセント辞典』に採録されている約六万語を、拍数別・語種別、語構造毎に型を集計した。-3に核のある型が、複合語の構造と複合形式によって生まるることを示す。また、1～4拍の語では頭高型と平板型が最も多く、2拍では尾高型が多い。5拍以上では、中高型(逆3型、逆4型)が支配的になるという。野村典正「単語の分類を用いた複合語のアクセント句分割とアクセント付与」(『電子情報通信学会論文誌』D-II Vol. J75-D-II No. 9)は、複合語を音声変換するために、複合語のア句分割とア付与を行う方法を示す。これによって「濃淡画像処理開発動向」のような長い漢語の音声にア付与ができる。

(三)　イントネーション

『日本語音声』の研究の中で、最も研究の進捗が見られる分野である。特に、無型アにおけるイントの研究は目ざましい。『言語』21-9はプロソディーの特集で、『日本語音声』の研究成果の要約とも言うべき一冊。方言を扱ったものに、前川喜久雄「熊本無アクセント方言のイントネーション」がある。この他、杉藤美代子「プロソディーとは何か」、郡史郎「プロソディーの自律性――フレージングを定める規則について」、鈴木博「言語技術としてのプロソディー」、東淳一「日本語の統語構造と韻律――統語的あいまい文の研究から」、往住彰文「韻律的生成の認知的メカニズム」、佐藤大和「プロソディーの生成――音声からみたプロソディー」、窪薗晴夫「プロソディーの普遍性」など。窪薗は、複合語と句との違いを日本語と英語を比較し、日英語の共通な特徴として、複合語アの型に枝分かれ構造が関与していることを

平易に指摘する。

『日本語音声成果報告　各地無型アクセント方言の韻律的特徴と教育』（飯豊毅一・山田泉編）は、無型アの代表的な地域の貴重な報告。文字化資料に無声化の表記があれば、アの獲得の傍証になるだろう。文にみられるイントのパタン分類は、新しい試みの一つ。

木部暢子・久見木大介「鹿児島市方言の質問イントネーションについて」（『鹿児島大学法文学部紀要　人文科学論集』38）は、二型アの鹿児島方言の若年層で「昇降調」が生まれ、老年層にはない質問の意味を表すイントとなっていると、イントの枠組みと変化の方向を鮮やかに描く。その他、今石元久「談話〈イントネーション〉論序説」（『広島女子大学文学部紀要』27）、今石元久・秋山和平「〈イントネーションと談話」（『日本語学』11-4）などがある。

村中淑子〝談話分析〟による文末部の音調の分析の試み――京都市方言を資料として」（『大阪大学日本学報』12）は、談話に多く現れる音調は、談話展開と関連があり、話者は、談話特徴とそれと関係の深い言語形式と音調を使うことを予想する。意欲的な研究。文末の音調の意味機能を考察する場合、文脈の考察は必要である。基準となる東京語の分析が進んでいないので、今後大いに期待される。

東京語のイントについて興味深い報告があった。田中ゆかり「〈とびはねイントネーション〉の使用とイメージについて」（『日本方言研究会第56回発表原稿集』）は、首都圏の高校生を中心に、ソレ　カワイクナイ〉のようなイントが現れることを指摘。本来のア核を無視した若者特有のイントが広まっているという。外来語の平板化と共に、東京アの若者言葉の特徴としてあげられる。

著者言葉のイントを現す述語として「尻上がりイントネーション」があり、これには原田香織「いわゆる「尻上がり」イントネーションの聞き取り実験」（『日本語音声成果『日本語イントネーションの実態と分析』』）の他、山口幸洋「撥ね下がりイントネーションについて」（『音声学会会報』202）、川上蓁「伸ばし下げ音調をめぐって」（『音声学会会報』203）のような述語があり、イントの内容の整理と述語の統一が望まれる。

三、音節（拍・音節・リズム）

（一）拍・音節について

国語学会平成五年度秋季大会でテーマ別研究発表会が行われた。「音韻史の展開・音節構造の歴史」（コンヴィナー＝早田輝洋・添田建治郎、発表者＝早田輝洋・窪薗晴夫・木田章義・柳田征司）の部会では、白熱した研究発表と質疑応答があった。音節・拍・シラブル・モーラなどの基本的な述語の概念がさまざまな形で使われていることが確認できたのもよかった。ただ、述語の中で「非拍方言」については、実際の聞こえが短い、独立してア核を担い得ないという二点からの命名で、実際の音声の聞こえと対立の上からの述語である。つまり北奥羽方言では、「かば・カバー」や、「管・組んだ」などが音韻的に対立しないことが根拠になっている。

上野善道「日本語の音節とアクセント」（『国文学解釈と鑑賞』58-1）は、東京語の「核の担い手（これを「拍」と呼ぶ）」がモーラなのか（音韻的音節なのかについて述べる。東京語の韻律的単位はモーラであるとし、東京語は「モーラ」が中心で「音節」は「周辺」であるとする。確かに連母音は方言の中でも同じ動きをするわけではない。例えば奈良県十津川方言では「赤い」や「行きたい」などの付属形

式のアイは融合してアカー、イターになるが、名詞の「挨拶・鯛」は融合しない。アエやオイ、ウイも融合しない。名古屋方言でも連母音アイは融合しやすいが、オイ、ウイはそれほどではない。早田輝洋「アクセントについての若干の覚え書き」（『九大言語研究室報告』14）にコメントがある。この他、原口庄輔編『日本語のモーラと音節構造に関する総合的研究』1・2（『日本語音声』成果報告）には、生成音韻論からみた興味深い論考が収められている。また、神鳥武彦「モーラ構成音素とアクセント・広島県安芸郡熊野町方言について」（『広島文化女子短期大学紀要』26）などがあり、今後とも議論を集めそうである。

（二）リズム

上村幸雄「日本語のリズムについて」（『教育国語』2-10・11）は、日本語のリズムについて、明快に広い視野から問題を指摘する。

岩井康雄「モーラ音素及びアクセントがリズムに与える影響と七五定型のリズム」（『言語学研究』11）は、これまでの「8モーラ4拍子論」の問題点を指摘する。例えば「地下資源部だけ」に字余り感があるのはアの影響であるはないが、「地下資源課だけ」は字余り感というの。この「字余り感」の判定は微妙で、方言によって違いがありそうである。この他、増井典夫「日本語のリズムと平易性」（『愛知淑徳短大研究紀要』31）も、拍と音節とリズムについての論考がある。

四、重点領域研究『日本語音声（略称）』

平成四年度プロジェクト終了にともない、大量の成果報告書が刊行された。多くの分野から研究者が参加してプロジェクトが遂行されたことは意義深い。特にこの研究では、CD・CD-ROM・DAT・ヴィデオなど新しい媒体により良質の方言音声が収集され、半永久保存が可能となった。今後、この研究の成果の新たな知見を整理して評価を下すにはまだ時間を要するが、日本語音声に関する我々の理解を一段と深めてくれることは間違いない。個々の研究には触れられなかったが、本文で取り上げた以外の、研究成果と論文名の一端を示す。

『日本語音声・成果報告』6、『研究報告日本語音声を考える』、『国際シンポジウム・日本語音声の教育と日本語研究』、『第7回〈大学と科学〉公開シンポジウム　国際化する日本語・話言葉の科学と音声教育』、菅野謙他編『自然なイントネーション（ヴィデオ）』、『東日本の音声――論文編』2〈小野米一「北海道根室方言のアクセント」、渡辺修平「秋田県横手市アクセントにおける世代差」、篠木れい子・佐藤和之「無型アクセントの音声実態と共通語化(2)」、下野雅昭「名古屋市アクセントの動態」、早野慎吾「文アクセントについて」〉、『東日本の音声――論文編　主要都市多人数調査（札幌市・名古屋市）報告』3〈大西拓一郎「三陸沿岸地域方言のアクセント語彙(2)」、山口幸洋「静岡県水窪方言の文末イントネーション分析」、太田有多子・山口幸洋「静岡県舞阪町――新居町のアクセント読み上げ調査について」〉、大橋勝男編『新潟市沼垂地区音声の研究』1、『方言音調の諸相――西日本』3〈中井幸比古「洛中洛外の地名とアクセント」、岸江信介「新宮旧市内アクセントの動向」、添田建治郎「隠岐の方言アクセント――二拍名詞を対象として」、陣内正敬「博多方言2拍名詞アクセントの世代差・文体差・文脈差」、中村萬里「筑前方言アクセントをめぐって――音声録聞見を通して」、木部暢子「鹿児島市二型アクセントの本質――連文節のアクセント

から」、田原広史「主要都市調査（大阪市）の言語意識項目（資料）」〉、徳川宗賢他編『福岡市におけるアクセントの動態（資料）』・『富山市におけるアクセントの動態（資料）』、真田信治他編『大阪―岡山間アクセントグロットグラム』、『琉球列島における音声の収集と研究』1・2、〈上村幸雄「音韻変化はどのようにしてひきおこされるか」、高良富夫・竹原康一「琉球方言音声の規則合成における韻律制御」、加治工真市・宮城信勇編「石垣方言音節一覧」〉、板橋秀一『日本語方言音声データベースの構築と利用』・『CD付属フロッピディスクデータベース』、三輪譲二『人文系研究者のためのポータブル型日本語方言音声分析システムの開発研究』、中本正智編『日本列島のイントネーション資料――琉球列島の部』・『日本列島のイントネーション――佐賀・輪島方言』、今石元久他『方言音声分析データ――並びに若干の考案』、『日本語イントネーションの実態と分析』〈国広哲弥「日本語音調の記述法」、井上史雄「専門家アクセントの使われ方」、荻野綱男「韻律特徴の理論的研究」、早田輝洋「東京方言におけるアクセントの担い手と複合の熟合度」〉、『日本語イントネーションの理論的研究――総括編』〈上野善道「複合語を中心とするアクセント調査研究」、荻野綱男・洪珉杓「音声の丁寧さの実験言語学的研究」、早田輝洋・久保智之「イントネーションと文法」、パネルディスカッション「言語における韻律の機能」〉、水谷修他編『日本語の韻律にみられる母語の干渉――音響音声学的対照研究』(2)(3)、『日本語音声と日本語教育』〈佐藤大和「外来語を材料としたアクセントの検討――構造とリズムに着目して」、宮城幸枝「韻律の特徴にあらわれる意図表現――〝そうですね〟の音響分析と意図表現の知覚」、轟木靖子「東京語の〝よ〟の音調と機能について」、土岐哲「日本語会話文の音読に見られる各地方言の韻律的特徴――弘前市出身者の場合」、鮎澤孝子「外国人学習者の日本語の質問文イントネーションの習得過程」〉、『日本語音声と教育』〈土岐哲「日本語音声教育の再検討と一試案」、土屋順一・土屋千尋「東京方言を母語としない日本語教師の発話における語末の母音のながさの比較対照」、犬飼隆「韻律的特徴にみる感動詞と終助詞の呼応」、山口幸洋「アクセンテーションの論」、秋山和平「放送音声と教育」、井上史雄「国際化する日本語の音声教育」〉、村崎恭子編『アイヌ語話者の日本語音声』1・2、久野マリ子編『二つ仮名・一つ仮名の音声』・『目で見る四つ仮名（ヴィデオと解説）』、中山一郎『日本語の歌唱における音韻の明瞭性について――摩擦音・破擦音・半母音・弾音の場合』、杉藤美代子編『日本語アクセントとイントネーション』、東淳一『韻律の研究』、甲斐睦朗編『聴解能力の基礎研究』、細田和雅編『日本語音声教育の社会言語学的言語工学的研究』、犬飼隆編『音声文法の試み』……

筆者の力不足と紙幅の関係で、多くの論考について割愛せざるを得なかった苦悩をお察しいただきたい。また、敬称は略した。

文献検索・資料収集に際しては、国立国語研究所の言語変化研究部・情報資料部・図書館の方々にお世話になった。お礼を申し上げる。

――國學院大學教授――